

問題解決型救急初期検査

田中和豊 著

＜書評者＞ 上條吉人（北里大学講師・救命救急医学）

ただただ、これだけの本を一人で書き上げた著者に脱帽の思いである。私もこれまで単著を上梓してきた自負はあるが、あくまでも救急領域の一分野に限定された内容である。ところが、本書のタイトルには「救急」と冠されているが、内容は救急領域を遥かに超えた幅広い分野に及んでいる。しかも、本書からは、著者の豊富な臨床経験ばかりでなく、広く深く正確な知識をもたらした著者の猛烈な知的欲求がにじみ出ている。「いったい何者だ？」という思いで著者の略歴を見て、合点した。物理学を学んだ後に医学を志し、さらに、臨床医としてインターナショナルに切磋琢磨され、著者が「戦場」とたとえた「救急医療現場」に飛び込んだ経歴の持ち主である。著者にお会いしたことはないが、とにかく並外れた「熱い心」と「エネルギー」の持ち主であることは容易に想像がつく。

「臨床検査」に関する著書は数多い。しかしながら、肩書きはあ

るが現場からは一線を置いた著者による、必要な情報を網羅しているだけの似たり寄ったりの凡書ばかりである。視線が現場にないのである。ところが本書は「この本を日夜戦場で戦う戦士たちに捧げる」と冒頭にあったように、自らが救急医療現場という過酷な「戦場」に身を置きながら、現場の視線で同志のために書かれている点になによりも惹かれる。おそらく、凡書など一切参考にしていないのではないか。

いたるところに限られた時間のなかで同志が理解・活用できるように工夫されたオリジナリティーが感じられる。特に、豊富なフローチャート、「STEP」、「POINT」などを用いて、読者がいますぐ現場で必要な情報に理論的、段階的にフォーカスできる工夫は圧巻である。

救急医療現場に必要な「初期検査」は、素早く適切な診断、治療につながる一助でなくてはならない。しかしながら、あくまでも

「一助」であり、大切なことは検査データと患者を相互に「見て（診て）」総合的に判断することである。「鉄則」や感度・特異度や検査の限界についての記載などによって、検査データのみを「見る」だけで判断する短絡思考に釘を刺してくれるところは非常にありがたい。

単著である本書の良さは、著者の「熱さ」を含めた人間性ばかりでなく、いたるところに著者の「熱い」メッセージが伝わってくる場所である。やはり共著とは異なる味わいがあることをつくづく感じた。単に臨床の手助けとなるだけでなく、特に救急医療現場という「戦場」を志す若い医師に、勇気や理想を与えてくれるはずである。ぜひ、勧めたい本である。

昨今、過酷な「救急医療現場」は若い医師に敬遠されがちである。しかし、ある程度の「自己犠牲」を「美学」として、戦う「戦士（救急医）」がまだまだいてもいいのではないかという思いを新たにしたい。

●B6 変 頁 544 2008 年
定価 5,040 円
(本体 4,800 円＋税 5%)
[ISBN978-4-260-00463-3]
医学書院 刊